

西荻窪の駅前広場は、ベレー帽姿の画家たちの姿が目立っていたので、戦後の一時期「ベレー帽広場」と呼ばれていたそうです。なぜ、当時の画家や文化人たちは、てっぺんにチョボのついた、どこかとぼけた感じもする帽子を好んで被ったのでしょうか。かねてから疑問に思っていたところ、知人が貸してくれた豆本のなかに『我がベレーの記』という格好の随筆を見つけました。著者は、柔道家で詩人だった竹下彦一、荻窪に住んでいた文化人の一人です。

ここで、おさらいをしておく、ベレー帽が生れたのはスペインとフランスの国境地帯に広がるバスク地方といわれ、画家とベレー帽の関係は、19世紀に入って、野外で絵を描くようになった画家たちが、日除け、風除けのために被ったことにはじまるようです。日本に伝えたのは、フランスに留学し、日本の洋画の父といわれる黒田清輝だといいますから年季が入っています。また、戦前は横山隆一、戦後は手塚治虫などが愛用したことから、ベレー帽は漫画家の象徴にもなりました。

『我がベレーの記』にもどると、竹下彦一がベレー帽を被りはじめたのは、終戦後、柔道を教えていた学校を辞めてからで、「学校の教師をしている内は、好きでもベレー帽は被って歩かれない」と書いていますから、自ずと世間からベレー帽がどう見られていたかがうかがわれます。

肝腎な「なぜ、ベレー帽を被るのか」への答えですが、「ベレー帽を被ると温かいし、ポケットの中にも丸めて入れられるし、嵩張らないし風なぞにも飛ばされないし、こんな便利な帽子はない」というもので、もっぱら実用性にしか触れられていないのは残念です。

ベレー帽の入手についても詳しく書かれ、それによると、初めはフランス製にこだわったらしく、「フランス文学の小松清さん」「作家の田村泰次郎さん」「那須仁九郎（陶芸家）さん」などの友人が渡仏するたびに頼んで、買ってきてもらっています。また、同じ柔道家の「石黒敬七旦那」からは「楽に被れるように、裏をちぎってくれたの」をもらうなど、日ごろから中央線沿線の文化人たちの間に親しいつき合いのあったことが、帽子を通して伝わってきます。



写真提供：石黒敬章

上の写真は、NHKラジオのクイズ番組「とんち教室」の出演者たちがバス旅行に出かけたときに撮られたものです。手前左の石黒敬七と三列目中央の漫画家・小川哲夫がベレー帽を被っています。同番組は、昭和24年から44年までつづいた人気番組でした。写真に写る出演者を紹介すると、石黒の隣に、桂三木助と清川虹子、二列目左から、長崎抜天（漫画家）、青木一雄（司会）、春風亭柳橋など。

「荻窪の記憶」プロジェクト 松井和男